

三重県精神保健福祉士協会 9月例会 レポート

三重県精神保健福祉士協会 9月例会を平成 28 年 9 月 4 日（日）に三重県立こころの医療センターにて「DPAT の活動報告会」という内容で開催しましたので報告します。今回の例会は桑名ブロックが担当でありましたが、桑名ブロックの会場では人の集まりが悪いということ、発表者が津方面の方ばかりであったこともあり、こころの医療センターさんのご厚意で会場をお借りすることとなりました。講演資料の件も含め、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

最初に三重県障害福祉課の牧戸貞氏より、「DPAT の概要」について話をして頂きました。DPAT の概要を理解したところで、熊本地震の際に派遣された三重 DPAT に参加されていた PSW の方 3 名から「三重 DPAT の活動報告」をして頂きました。それぞれ期間が異なり、活動内容も変化していました。

最初に先遣隊の 1 班として活動された榊原病院の福澤咲子氏から活動報告を話して頂きました。PSW として現地で何をしたら良いのだろうか？というご自身の思いも含めて、混乱する現地において、被災した病院から県外へ転院支援を行った経験や三重 DPAT が行うことになった拠点本部を担った経験などを分かり易く報告して頂きました。現地で役立つものの情報なども参考になると感じました。

次に、先遣隊の第 3 班として活動された こころの医療センターの山本綾子氏から活動報告して頂きました。拠点本部業務として、対応が必要なケースに対して、複数のチームのスケジュールを把握しながら、必要な支援を割り当てていく。言葉ではサラッとですが、日々変化する状況の中で、どう情報を把握し、どう情報を共有し、その中で何を判断するのかという問題を、視覚化し、ミーティングで共有していくための、1 日のスケジュールを作成、情報共有のフォーマット（ライティングシートを使ってスケジュールや状況が一目でわかるもの）を作り、チーム運営を非常に円滑にしていた過程はさすがやな〜と。DPAT の活動において、求められるのはチーム力であり、日ごろの業務でいかに顔の見えるつながり、他圏域とのつながり、他県とのつながりを持っているか等、日ごろの実践が問われてくることでした。

最終の報告は、三重 DPAT 第 8 班として最後の活動をされた、あすなろ学園の寺田健二氏からの活動報告で、メールアドレス変更が調整本部に伝わっていないなど、引き継ぎと現状が違うところから始まり、避難所の数が減少し、被災者の心理状態も排他的な心理や無気力な心理と経過している状況。子どものケースへの支援、孤立した集落への支援、避難所にいる職員への心理的ケアのための講習の実施、他県の DPAT への引き継ぎ、撤収作業などを報告してもらいました。課題として、避難する避難所によって避難所地域の住民でないため住民サービスが受けられない等の避難所格差や顔の知らない者同士による連絡調整のため、伝達方法の課題であったり、役割分担などの課題をあげてもらっています。

被災地支援を行う場合には、DPAT は情報提供に徹して、決断は被災病院に委ねるというスタンスや非常時においては日ごろの関係（つながり）が大事であり、密なコミュニケーションやチームワークが大切ということがよくわかり、同じ PSW からの活動報告ということで当事者意識を持って聞くことができました。予定していたグループワーク（意見交換）は時間の都合でできませんでしたが、三重県においても想定される南海トラフ巨大地震が発生した際にどう行動するか？日ごろから考えて、いざという時に顔の見える関係性、チームワークが発揮できるよう備えていきたいと感じました。